

Microsoft SQL 2000 での Cisco ICM データベースのバックアップ

目次

- [概要](#)
- [前提条件](#)
- [要件](#)
- [使用するコンポーネント](#)
- [表記法](#)
- [背景説明](#)
- [バックアップ デバイス](#)
- [ICM データベースのバックアップ](#)
- [新しいディスク ダンプ デバイスの作成](#)
- [データベース バックアップの作成](#)
- [ICM 設定およびスクリプト データのバックアップ](#)
- [関連情報](#)

概要

このドキュメントでは、ICM バージョン 5 および Microsoft SQL 2000 環境で Microsoft Database Backup Wizard を実行して、完全な Cisco Unified Intelligent Contact Management (ICM) データベース バックアップを実行する方法について説明します。

前提条件

要件

このドキュメントの読者は次のトピックについて理解する必要があります。

- Cisco ICM
- Microsoft SQL

使用するコンポーネント

このドキュメントの情報は、次のソフトウェアとハードウェアのバージョンに基づくものです。

- Cisco ICM バージョン 5.x 以降
- Microsoft SQL 2000

このドキュメントの情報は、特定のラボ環境にあるデバイスに基づいて作成されたものです。このドキュメントで使用するすべてのデバイスは、クリアな (デフォルト) 設定で作業を開始しています。ネットワークが稼働中の場合は、コマンドが及ぼす潜在的な影響を十分に理解しておく

必要があります。

表記法

ドキュメント表記の詳細は、『[シスコテクニカルティップスの表記法](#)』を参照してください。

背景説明

完全ログ、差分ログ、トランザクション ログ、ICM 設定およびスクリプト データのバックアップの相違を理解しておくことが重要です。

- **完全バックアップ**：最後のバックアップ以降に変更があったかどうかに関係なく、データベースのすべてのデータをバックアップします。
- **差分バックアップ**：前回の完全バックアップ以降のデータベースの変更のみをバックアップします。このオプションは、バックアップ メディアで使用するスペースが少なく、短時間で終了します。このタイプのバックアップは、定期的な完全バックアップの補足として使用してください。差分バックアップを復元する前に、最後の完全バックアップを復元する必要があります。
- **トランザクション ログ**：最後のトランザクション ログのバックアップ以降にトランザクション ログに書き込まれたトランザクションをバックアップします。このタイプのバックアップは、短期間のデータを保護するために使用します。トランザクション ログのバックアップを復元するには、最後の完全バックアップを適用してから、最後の差分バックアップを適用し、その後最後の差分バックアップ以降に作成されたすべてのトランザクション ログのバックアップを復元できます。
- **設定およびスクリプト データ バックアップ**：構成データは、Contact Center Enterprise を記述し、すべてのペリフェラル、サービス、着信番号、ルート、およびペリフェラルのターゲットが含まれます。また、スクリプト データは両方のロガーに保持され、コール ルーティングで ICM ソフトウェアが使用するすべてのコール ルーティングと管理スクリプトが含まれます（現在のバージョンと以前のバージョンの両方）。二重化された集中型コントロールシステムでは、構成データは両方のロガーで二重化された状態で保持されます。ロガーを再起動したときは、必ず再同期されます。

バックアップ デバイス

バックアップ デバイスにバックアップが保存されます。ディスク デバイスとテープ デバイスの 2 つのオプションがあります。

- **ディスク デバイス**：ディスク デバイスは、ハードディスクなどのストレージ メディアです。これらのデバイスはリモート サーバ上に存在します。ICM データベースと同じディスクにバックアップを配置しないでください。
- **テープ デバイス**：テープ デバイスの取り扱い、基本的にはディスク デバイスの取り扱いと同じです。唯一の違いは、リモート テープ ドライブをサポートせず、テープがいっぱいになると、別のテープが求められます。

ICM データベースのバックアップ

新しいディスク ダンプ デバイスの作成

バックアップ デバイスは、物理名と論理名のいずれかで参照することができます。物理名は、ディスク デバイスのファイル名です。論理名は物理名のエイリアスで、バックアップ デバイスを使用する前に SQL サーバ内から作成されます。論理デバイスを作成する手順は、次のとおりです。

1. SQL Server Enterprise Manager を開き、[Start] > [Programs] > [Microsoft SQL Server] > [Enterprise Manager] の順に選択します。
2. ICM データベースが格納されている SQL サーバに接続します。
3. [図 1](#) に示すように、[Management] ノードの下にある [Backup] コンテナを開きます。 **図 1 : [Management] ノードの [Backup] コンテナ**
4. [Backup] を右クリックします。
5. [New Backup Device] を選択します。 [図 2](#) に示すように、[Backup Device Properties] ダイアログボックスが開きます。 **図 2 : [Backup Device Properties] - [New Device]**
6. ICMSQL2000DD など、論理名を入力します。注: デフォルトの格納場所やファイル名などの論理名を使用すると便利です (選択した場所やファイル名にすることができます)。
7. ディスク デバイスの代わりにテープ デバイスを使用している場合は、手順 5 で [File name] の代わりに [Tape drive name] を選択します。
8. [OK] をクリックして、新しいバックアップ デバイスを作成します。

1 つのバックアップ デバイスを使用して、複数のバックアップを保存できます。SQL Server Enterprise Manager を使用したバックアップ デバイスの作成に制限はありません。また、SQL サーバにはクエリ アナライザからバックアップ デバイスを作成できる `sp_addumpdevice` ストアド プロシージャも付属します。このストアド プロシージャの構文は次のとおりです。

```
sp_addumpdevice {'device_type', 'logical name', 'physical name'}
```

注: 最初のパラメータはデバイス タイプで、ディスクまたはテープのいずれかです。次にデバイスの論理名、その後には物理名が続きます。

データベース バックアップの作成

ICM データベースのバックアップを準備するときに、次の項目を考慮したことを確認します。まず、生産性の影響が最も少ない時間にバックアップのスケジュールが設定されていることを確認します。次に、データの整合性を保護するために、ICM データベースのバックアップ中に、次のアクションを実行しないでください。

- データベース ファイルの作成または削除
- インデックスの作成
- ログに記録されない操作の実行
- データベースの縮小

これは、ICM データベースのために新しい ICM データベースのバックアップを作成する手順です。

1. SQL Server Enterprise Manager を開き、[Start] > [Programs] > [Microsoft SQL Server] > [Enterprise Manager] の順に選択します。
2. ICM データベースが格納されている SQL サーバに接続します。
3. [図 3](#) に示すように、[Tools] > [Wizards] を選択します。 **図 3 : SQL Server Enterprise Manager --- ツール**
4. クリックして [Management] を展開します。

5. バックアップ ウィザードの選択
6. [図 4](#) に示すように、[OK] をクリックします。 [図 4： ウィザードの選択](#) [図 5](#) に示すように、[Create Database Backup Wizard] 画面が開きます。 [図 5： データベース バックアップ作成 ウィザード](#)
7. [Next] をクリックすると、[図 6](#) が表示されます。 [図 6： バックアップするデータベースの選択](#)
8. 下矢印をクリックして、バックアップする ICM データベースを選択します。
9. [Next] をクリックします。 [図 7： バックアップの名前と説明の入力](#)
10. バックアップの名前と説明を入力します。
11. [Next] をクリックします。 [図 8： バックアップ タイプの選択](#)
12. [Select Type of Backup] 画面で、作成するバックアップのタイプを選択します。注: デフォルトは、ICM データベースのフル バックアップです。
13. [Next] をクリックします。 [図 9： バックアップ先とアクションの選択](#)
14. バックアップ デバイスとして、[Tape]、[File]、または [Backup device] を選択します。
15. [Read] を選択し、バックアップ後にバックアップの整合性を確認します。
16. [Next] をクリックします。 [図 10： バックアップの確認およびスケジューリング](#)
17. [Check media set name and backup set expiration date] を選択して、今後のバックアップが既存のバックアップを間違っ上書きしないようにする必要があります。
18. また、定期的なバックアップ処理のスケジュールも設定できます。
19. [Next] をクリックします。 [図 11： データベース バックアップ作成ウィザードの実行](#) これは、選択したオプションの[サマリ](#)です。
20. [Finish] をクリックします。
21. バックアップが作成されて確認されます。注: バックアップ処理中に、これらの 3 つのボックスが表示されます。これらのメッセージは、バックアップ、確認、バックアップの完了を表します。 [図 12： バックアップの進捗状況](#) [図 13： バックアップの確認](#) [図 14： ウィザードの完了](#)

バックアップ ウィザードは、データベースのバックアップを作成する簡単な方法です。ただし、リモート サーバに接続する場合は、バックアップ機能を実装する T-SQL バッチを発行した方が高速です。完全バックアップと差分バックアップを実行するコマンドは、**BACKUP DATABASE** です。詳細については、『SQL Server Books Online』を参照し、「Backup Database」を検索します。

バックアップを確認するために、**RESTORE VERIFYONLY** コマンドを実行します。

```
restore verifyonly from disk='physical name'
```

[ICM 設定およびスクリプト データのバックアップ](#)

データベースのサイズによっては、バックアップ デバイスからデータベース全体を復元するのに長時間かかることがあります。復元を高速にするために、履歴データなしで ICM の設定とスクリプトのデータのみをバックアップすることをお勧めします。ICM は ICMDBA ユーティリティを使用して、設定データとスクリプト データをバックアップします。詳細な手順については、「[ICMDBA を使用した ICM コンフィギュレーション データベースのバックアップ](#)」を参照してください。

関連情報

- [ICMDBA を使用した ICM コンフィギュレーション データベースのバックアップ](#)
- [テクニカルサポート - Cisco Systems](#)